

文学部 比較文化学科 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時00分まで(90分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に5ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題 次の文章を読んで設問に答えなさい。

この9月1日は関東大震災から100年であった。この日、私はちょうど岩手県の三陸海岸のある小さな町にいた。津波にのみ込まれ一瞬で消失した町だった。あれから12年半がたつ。防潮堤ができ、広い道路が整備され、きれいな宅地も広がっている。だが残念なことにそこに住んでいる人はほとんどいない。だっ広い空間の中に道の駅だけがたたずんでいる。

その場所だけみれば、新興住宅地の計画が始動しているのかと思ってしまいそうだ。しかし、12年前のあの悲劇を思えば、いささか複雑な心境になる。復興とは何なのかと思ってしまう。

私のように関西在住の者は、人々が戻り、町が少しずつ昔の様子を取り戻すことが復興だといつ気楽に考えてしまう。だが、すべてを失った当事者からすれば、何が復興なのであろうか。復興はむろん復古ではない。この場所を捨ててやり直すという決断もあるだろう。正解など何もないのだろう。

いうまでもなく、日本は世界でもまれな地震大国である。今後、南海、東海、それに首都圏で大地が鳴動する可能性はきわめて高い。とりわけ首都圏大地震が襲いかかれば、想像を絶する事態になる。しかし、30年以内の首都圏大地震の確率70%などといいながら、政府の対策も形だけのものにしかみえず、われわれも、巨大地震の接近をできるだけ頭から追い払おうとしている。

確かに、行政的にも個人的にもやれる対策はしれており、みもふたもない言い方をすれば、「きたらきたで仕方ないではないか」ということになるのであろう。首都機能の移転、人口過密地区の人口分散、ビルの建て替え、巨大な防潮堤の建設など、本気でやるべきことはいくらでもあるが、それだけの財政的余裕もなく、法的整備も困難だとなれば、それぞれが、自分で身を守る方策を考えておくほかない。確かに、「きたら仕方ない」という割り切りも、それこそ仕方ないのかとも思う。

この「シカタナイ」が、ある覚悟を伴ったあきらめなのか、それとも単なる思考停止の口実なのかとなると、実はよくわからない。

そこでどうせ「シカタナイ」というなら、ある程度、「覚悟を伴ったあきらめ」の方に傾きたいとも思う。言い換えれば、そこに何かある種の日本人の独特の心性、精神

文化、価値観を刻印したものであってほしいと思う。

1755年にリスボンで巨大地震が発生した。これは、西欧にとっては衝撃的な出来事で、神は世界を完全なものとして創造したとするキリスト教の楽観主義を打ち砕き、近代社会の到来をはやめた、といわれる。

リスボン大地震から強い影響を受けた一人に哲学者カントがいるが、彼はこう述べている。人間は想像を絶する自然の働きの中に「崇高さ」を感じる。地震だけではない。巨大な暴風、^{ばくふう}瀑布、火山の噴火、^{どとう}怒濤渦巻く海、これら恐るべき現象は、自然へ向けた「崇高さ」の感覚をもたらす。またそれは、人間に恐怖を与え、人間の無力を思い知らせる。しかしその時、人間は、理性の力によって、この恐怖に打ち勝ち、無力感を克服して、自然の脅威に敢然と立ち向かう。そこにこそ、人間のもつ真の「崇高さ」がある。

このようなことをカントは述べた。人間は、理性の力によって自然の脅威に立ち向かう崇高な精神を持っており、それによって自然より優位にたてる、という。

また、東日本大震災のおり、被災地を訪問したルース駐日米国大使は、「自然は貴重な生命を破壊するかもしれないが、人の精神まで破壊することはできない」といって被災者を励ました。精神があれば、また自然に立ち向かい復興できる、ということである。

このルース大使のいい方はカントを思わせる。共に、崇高な精神こそが、自然の脅威を克服する力を人間に与える、というのだ。人間は、「精神の力」によって自然をコントロールできるという信念がそこにはみえる。

大使の励ましは、日本のメディアでも評判はよかったし、こういういい方が即座にでてくるところに西洋文化の基底をなしているユダヤ・キリスト教の存在を感じたりもする。キリスト教では、神は自然よりも人間を上位においた。その土台の上に、精神（理性）をもつ人間は自らの利益のために自然を管理することができる。こういう考えが西洋文化の核にある。

ところで、東日本大震災の直後に、私は宮沢賢治の「グスコーブドリの伝記」を改めて読んでみた。冷害に苦しむイーハトーブ^(注1)の話である。島にある火山を爆発させれば、気温上昇で人々を救うことができる。火山局に勤務する若い技師ブドリは、ある技術を使って火山を人工的に噴火させて人々を救うのだが、そのために自らは噴

火の犠牲になる。こういう物語である。これは、もちろんあの大地震と津波とは違っているが、いくつかの点で興味深い。

イーハトーブに冷害を引き起こすのは自然であるが、また、自然の力が人々を救うのである。火山は巨大噴火によって人間に大きな損害をもたらすだろうが、またその火山によって人は救われもするのである。その自然の力を動かすのは、一人の技師の自己犠牲であった。しかもそれは、特別な豪傑でも英雄でもなく、「普通の人」の淡々とした自己犠牲である。

ここには、自然の暴威などには負けず、立ち向かおうというルース大使の励ましとは、また異なった自然観が横たわっているように思える。日本人にとっては、自然は、山川草木や気象現象から動物や人間までの森羅万象を包括するものであり、それは、何の意図も計画もなく、おのずから事物を生成し、変化させ、衰退させ、また再生するといった無限の運動なのである。もともと「自然」は「ジネン」と呼ばれたように、「おのずからある」また「おのずからなる」ものであった。それゆえそれは人知人力を超えている。

大地から植物が芽生え、成長し、開花し、落葉し、そして枯れて大地に戻る。しかし、次の年にはまたそれは大地から芽生える。こういう延々と続く循環のイメージがそこにある。そしてまた、これは人のあり方そのものでもあろう。人は人生を終えて大地に戻っても、「魂」は生き残り、また大地に芽生える次の命に引き継がれる。それを可能とするのは、自然のなかに存在する何か「生命」というべきものであろう。こういう考えが昔の日本にはあった。

自然のなかには「生命の力」があるがゆえに、自然は、一方では、人を恐怖に陥れる巨大災害をもたらすが、また逆に、大地の恵みや澄んだ大気によって人々の生命に活力を与える。その両者ともに、自然のもつ「生命」の働きであり、昔の日本人は、それをまた「カミ」といったりもした。

カントが「崇高な」といった自然の壮大なエネルギーの発動を日本人は「神々しい」と形容し、森の巨木やそびえる山岳や奇怪な岩などにも「カミ」の顕現を見た。さらに、こういう際立った「カミ」の現出でなくとも、日本人にとっては、「カミ」は、ありとあらゆる場所にひっそりと隠れており、またどんな小さなものにも宿りうるものでもあった。

それを「カミ」と呼ぼうが、「いのち」と呼ぼうが、ともかく無機質な物質的現象としては捉えられない「生命的なもの」を、日本人は自然のなかに見たのである。しかも、人間もまた、その「自然」のなかで生命を営んでいるとすれば、自然の管理など、人の領分を超えている。こういう考えがかつてはあった。

今日、われわれはもはやこんな自然観をあからさまに語ることはない。自然災害には理由があり、それゆえ自然科学的な解明を期待できる。科学の進歩が、自然現象の謎を解き明かす時がくるとみなしている。しかし、日本人は、本気でそう思っているのだろうか。

表面的にみれば、科学と技術万能の時代にわれわれも生きているのだが、西洋文化のもつ、人間社会に対する自然の脅威や障壁に対し、ありとあらゆる資金と人力を投入して立ち向かう強い意志は、われわれには希薄である。それは、私には、日本と西洋の文化の根底にある自然観の違いによるところが大きいように思われる。

日本人の持っている自然観からすれば、人間社会に大きな災いをもたらす自然災害であっても、そこには人間の理解の及ばない自然の働きがあり、だから「シカタナイ」といって忍従するほかない、ということになろう。その自然への忍従の姿勢は、ある意味で「うまくあきらめる術^{ずべ}」でもあった。

こういう感覚が、この科学万能時代にあっても、日本人の心の底にまだ残っていても決して不思議ではない。「シカタナイ」は、決して無責任な「敗北主義」ではない。時としては、日本の自然観がもたらしたひとつの知恵でさえもあるだろう。世界的に自然環境が破壊される現代にこそ、生きたものとして自然をみるという日本の自然観を日本人自身が復興しなければならないのではなかろうか。

(佐伯啓思「日本の自然観と災害」『朝日新聞』(2023年9月30日)による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

(注1) イーハトープ：宮沢賢治の造語で、彼の心中に思い描かれた理想郷のこと。

問1 著者の言う日本人独特の価値観が刻印された「シカタナイ」とはどのような意味か。日本と西洋の自然観の違いに触れながら、350 字以内で説明しなさい。(100 点)

問2 下線部の意見に対するあなたの考えを 400 字以内で述べなさい。(100 点)